6/16 fri. 2017

NODE vol.15

kanayama
machidukuri
kawaraban

金山地区のまちづくりを語る会 が、
金山のまちづくりに関わる皆さんにとっての
「交流や情報の結節点」でありたい。
次々と新たな活動が生まれるような、
「創造力の結節点」といえる場でありたい。
そんな願いを込めて、本誌の名前を
『NODE 【結節】』としました。

第 13 回の「語る会」は、今後のアクティビティ（活動・取り組み）を視野に入れ、「イザ！カエルキャラバン！」という防災イベントをご紹介しました。

「イザ！カエルキャラバン！」は、阪神・淡路大震災、東日本大震災で被災された方々の声をもとにプログラムされた、小さな子どもでも気軽に参加でき、家族や友達と楽しみながら防災知識が身に付く新しいカタチの防災訓練です。

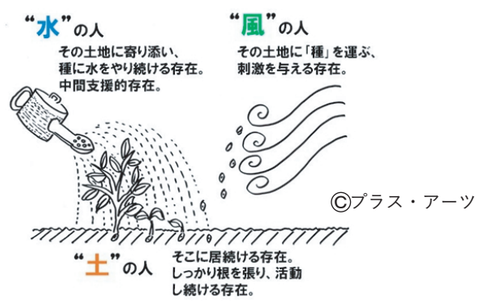
今回は、このイベントの考案者であるＮＰＯ法人プラス・アーツの永田理事長をお迎えして、イベントの紹介のほか、地域コミュニティのお話しなど、大変幅広く、興味深いお話を伺えましたので、その概要をお伝えしたいと思います。

永田 宏和 氏
企画・プロデューサー、まちづくりコーディネイター
株式会社 iop 都市文化創造研究所代表取締役、NPO 法人プラス・アーツ理事長
著書『都市・まちづくり学入門』（共著）『第 6 回 21 世紀のまちづくり賞・社会活動賞』受賞

私は建築畑の出身ですが、建物を建てるより、まちの営みのようなソフトに興味が湧いてきて、8 年間勤めたゼネコンを退社し、平成 13 年に企画プロデュース・まちづくりコーディネートの会社を設立しました。

会社設立当時は、「企画」を商売にするのは大変なことでしたが、近年では建物を「新築」するより「今ある建物を如何にして活用していくか」にシフトしており、そうなると企画力・編集力・コーディネート力といった、いわゆる「ソフトの力」が求められるようになっています。

■ 土の人・風の人・水の人



まずは、まちづくりや地域活動を支援する際に大切にしているフィロソフィーについてお話ししたいと思います。

まちづくりやコミュニティづくりは「土の人」「風の人」「水の人」３つの存在が必要だと思っています。

「土の人」はしっかりと根を張り、そこに居続ける人、つまり市民や住民など地域の人です。

「種」は地域の活動です。土が肥えていれば原種だけで芽を出していました。「土の人」だけで助け合い、地域の活動は盛んに行われていたのです。ところが、地域の関係が希薄になった現代は「土」が痩せ、固まっている状態で、原種だけでは根を張って芽が育たなくなっています。

そこで必要になるのが品種改良した「新たな種」です。そして、他所からその新種を持ってくる、地域に刺激を与える「風の人」が必要になっています。ただし「風の人」はすぐに去って行ってしまいますので、地域に寄り添い、世話をしていく人も必要になります。それが「水の人」です。

私は「風の人」です。皆さんは何の人ですか。

「風の人」は主に「水の人」に呼ばれます。ただし、「水の人」にも作法があります。それは「水をやり過ぎない」ことです。地域活動は、土（地域）が育ってきたら水のやり方を控えることが必要になるのです。つまり、徐々に地域に委ねていくのです。したがって、精力的に引っ張るばかりでなく、時として弱音を吐き、助けを求めることも大切になってきます。それは、なかなか参加してくれなかった地域の人を巻き込むきっかけになるからです。

次に、風が運んでくる「いい種」、つまり、地域の人を巻き込むような「種」とはどのようなものかを考えてみましょう。

■ 種の極意

種（地域のイベントや活動）の極意は「不完全である」ことと、「魅力がある」ことです。

「不完全」とは、関わり代（しろ）や余地があるということです。

みんなで一緒に編集しながら、お仕着せでない「自分たちの活動」にできる「余地」があることが大切なのです。

二つ目は、活動自体に魅力がなければ誰もが離れていってしまいます。まずは興味を持ってもらえるような魅力あるプログラムを企画することが必要になってきます。そのためにはクリエイティブの力を導入する「＋クリエイティブ」が不可欠です。

そして、魅力的な企画作りには「０から考えてみること」、「チームで考えること」が必要です。既成概念に囚われず、色々な世代、様々な立場の方々が一緒に考えていくことで思いもよらないアイデアが生まれてきます。最近はワークショップが盛んに行われていますが、そのメンバーや運営の仕方も大切で、質が問われる時代になっていると思います。

そして、実際はうまくいかないことも多いと思いますが、「トライ＆エラー」続けていくことが大切です。

■ 地震ＩＴＳＵＭＯプロジェクト

22 年前、平成 7 年に阪神・淡路大震災が発生しました。直下型のそれは激しい揺れで街はめちゃくちゃになりました。その時にわかったのは地震が起きた時は「何もできない。」ということです。ですから「備えておく」ことが大切になってきます。

地震発生後の状況を聞いてみますと、「周りの人に助けられた」という人が 6 割以上、自衛隊や消防隊などに助けられた人は 5% に満たない状況です。近所の人には何かしらお世話になるのです。近所の人とは普段から仲良くしておいた方が良いと言われました。

我々は、地震発生から 10 年後に兵庫県と神戸市から依頼を受けて活動を始めました。

被災した神戸から何を学び、発信する必要があるのかを考えたとき、被災現場のことは被災者が一番知っているであろうということで、被災者が被災地で学んだこと、感じたことを教えてもらい、伝えていこうということになりました。

被災から 10 年という年月が過去を振り返って話を伺うことを可能としたという面はあると思います。117 名の方にアンケートを行い、50 名の方に直接お話を伺うことができました。

そこから教えていただいたことは、「もしも型」から「いつも型」にした方がいいということです。地震は「いつも」発生する可能性があるのですから、準備しておく必要があることを伝えていこうと思ったのです。

我々「プラス・アーツ」は防災教材も制作しています。カードゲームやボードゲーム、マンガや紙芝居、書籍も発刊しています。これらの多くは防災教育に取り組みたいという企業から依頼を受け、依頼者と一緒になって作り、普及させているものです。

「地震ＩＴＳＵＭＯプロジェクト」は、震災から学んだことにデザインをプラスして、イラストなどを使用した防災啓発ツールを作り、わかり易く、多くの人に伝えることを目的としています。

『地震イツモノート』は、地震発生直後から避難生活まで、読者が自身の震災に対する備えを考えることができる図書ですが、内容をホームページで公開していますので、ぜひご覧いただきたいと思います。

地震ITSUMO

本日お配りしていますが、『防災マニュアルブック＆緊急連絡ガイドブック』は常時携帯できるサイズで、災害時に役立つ「知識」や「技」のほか、安否確認の方法と連絡先を記入できるようにしてあります。最近は携帯電話に頼り切って、家族などの電話番号を憶えている人は少なくなっています。自身の携帯電話が使用不能になった時に連絡先がわからなくて困ってしまうことは充分に考えられます。

このガイドブックは東京ガスの依頼を受けて制作しましたが、大変良いものができたので、東京ガスの協力を得て、皆さんに提供できる仕組みを作りました。今では 30 ～ 40 の企業や団体が色や表紙を変えてオリジナルのものを制作し、活用してもらっています。

前段でもお話ししましたが、「種」に変わる余地がありますので、それをきっかけにコミュニティが拡がっていくのです。

ただ、防災の知識や技はマニュアルを配っただけでは身に付きません。講座やイベントなど、多面的・複層的にやっていかないと拡がりませんし、本当の学びにもなりません。

■ イザ！カエルキャラバン！

被災者から学んだことの伝え方はたくさんあります。対象を子どもにしたとき、子どもに文章だらけの本を渡しても興味は示さないでしょう。ですから、子ども向けにはゲームやクイズを駆使した楽しい防災訓練という場を作って、教えていこうということで、2005 年に「イザ！カエルキャラバン！」を開発しました。

カエルキャラバンは、小さな子どもでも気軽に参加できる、楽しみながら学べる新しい防災訓練で、全国 33 都道府県において 380 回以上開催されています。また、海外でもＪＩＣＡや国際交流基金の依頼により 17 ヵ国で開催しています。

プログラムの一部を簡単に紹介します。

◎ 水消火器で的あてゲーム

ＮＰＯ法人
プラス・アーツ
ＨＰより

ゲーム形式で消火器の使い方を学びます。全てクリアしようと何度もチャレンジしていくうちに使い方を覚えていきます。

◎ 対決！バケツリレー

ＮＰＯ法人
プラス・アーツ
ＨＰより

チームに分かれて競い合いながら体験します。実際の消火活動には２列（水を運ぶ列と空のバケツを返す列）必要であることや、水はバケツ満杯ではなく 6 割程度にすることが必要であることを学びます。

◎ 毛布で担架タイムトライアル

ＮＰＯ法人
プラス・アーツ
ＨＰより

身近にある毛布を担架にしてケガ人を運ぶ方法を体験し学びます。

◎ 持ち出し品なぁに？クイズ

ＮＰＯ法人
プラス・アーツ
ＨＰより

避難の際に持ち出す物の種類や役割、備蓄についての知識を暗記クイズで楽しみながら覚えていきます。

その他にも、紙食器の作り方やカードゲーム、すごろく、紙芝居など 30 を超えるメニューがあります。

例えば、消火器の使い方にしてもカードゲームで学んだあとで実際に的あてゲームで使ってみることで、頭と体で学びを重ねていくのです。

また、人気のプログラムに「なまずの学校」というカードゲームがあります。これは、震災時に発生するトラブルを知り、その解決に有効なアイテムを学ぶプログラムですが、正解は一つでなく、自分で色々考えることができるので、防災関連の教材として全国の学校でも活用されています。

これらのプログラムは、神戸市消防局の監修を受けています。また、運営スタッフには研修を受講してもらいますし、子どもたちも年齢に応じたプログラムに参加できる仕組みになっています。

以上のように、カエルキャラバンは色々趣向を凝らして楽しむことのできるイベントですが、これだけでは子どもを集めるのは難しい面があります。

そこで、子どもを惹きつけるため、「かえっこバザール」を同時開催することにしています。

「かえっこバザール」は、遊ばなくなったオモチャを持ち寄って、「カエルポイント」で欲しいオモチャと交換するというものです。「カエルポイント」は持ってきたオモチャと交換でもらうことも出来ますし、カエルキャラバンのプログラムに参加することでももらえる仕組みになっています。

今はどこの家にも使わなくなったオモチャが溢れています。それが活用され、なおかつ楽しい。「楽しい防災訓練」と「かえっこバザール」という二つのイベントを組み合わせることにより、時に千人を超える防災訓練となり、より多くの方に「震災で学んだこと」を伝えることができるのです。

そして、今やこのカエルキャラバンは、それぞれの地域や団体によって少しずつオリジナリティを加え実施されています。例えば、カエル人形をヤモリ（沖縄）など独自のキャラクターにしたりと…。これはもうカエルキャラバンではないのですが…（笑）。

つまり、「自分たち」のイベントになっているのです。まさに地域のお祭りです。カエルキャラバンという「種」は「変わる余地」がありますので、やり方は自在です。「みんなで創る」ということが重要で、それを信じてやっていくと協力者が増えてきます。コミュニティを復活させるきっかけにもなっているのです。

■ 地震ＩＴＳＵＭＯ講座から。

本日は、折角お越しいただいているので、震災の際に必要となる、役に立つ防災グッズをご紹介しますので、是非覚えてお帰りいただきたいと思います。

本当は 12 個のグッズを紹介するのですが、今回は時間の都合もありますので、その内の９つを紹介します。

なお、震災時に設置される避難所は定員の問題もありますし、決して快適な環境が確保される訳ではありません。よって、可能であれば自宅で避難生活を送る方がいいと思いますので、それに必要な防災グッズをご紹介します。

★ 水

まずは水です。水が必要になることはどなたでもご存じだと思いますが、重要なのはその量です。

成人男性で１日あたり２～ ３ℓの水が必要と言われています。これは尿や排便などで排出する水分が決まってますので必ず必要になる量です。震災時はいつ助けがくるかは解りませんので、国は１週間分の備蓄を啓発しています。そうしますと、市販では１箱が２ℓ×6 本入り

で売られていますので、4 人家族の場合は常時５箱以上の備蓄が必要になるということです。

◎ ポリ袋（ゴミ袋）

これは大量に用意しておくと便利です。給水車から水を運ぶのにも役立ちます。リュックサックにポリ袋を重ねた状態で被せて使えば、特にマンションなど上層階の方にはポリバケツで運ぶより数段楽になるはずです。

また、簡易トイレとしても役に立ちます。上下水道が復旧するまで最低１カ月はかかると言われており、トイレが大問題になります。そして、トイレの一番の問題はニオイです。トイレで使用した携帯トイレやポリ袋の保管場所として蓋の付いたコンテナを庭やベランダに置いておくことも必要です。

◎ ラップ

これも水対策の一つです。水節約のため食器にかぶせて使用します。長めのラップ５本程度備蓄しておくと良いでしょう。

◎ ＬＥＤランタン／ヘッドライト

多くの方は懐中電灯を常備してると思いますが、照明がつかない中、室内照明にはアウトドアグッズのＬＥＤランタン（リビング・キッチン・トイレ用３個）を用意しておくと便利です。また、ちょっとした作業でも両手を使える状態にする必要がありますので、手元の明かり用にも懐中電灯ではなくヘッドライトが必要になります。

◎ 口腔ケア用ウェットティッシュ

震災で歯磨きができずに子どもや高齢者が肺炎になったケースが報告されています。これは介護用品ですが、歯磨き代わりのほか、箸やスプーンを拭くこともできますので大変役立ちます。

◎ 体拭きウェットペーパー（300×600mm）

しばらくはお風呂も使えません。大きなサイズのものを用意しておくことが必要です。

◎ 保存食

食事も 1 週間全て保存食というのは難しいので、最初の 3 日間は家に買い置きしてある食料品を食べ、4 日目から保存食に移行します。ただし、最近はフリーズドライやレトルト食品など大変美味しく、栄養価もあるので、保存食というよりは日常の買い置きが沢山ある状態だとお考えください。そして、最近よく耳にしますが「ローリングストック」日常的に食し、買い足すことで無理なく備蓄が可能となります。

◎ カセットコンロ・ボンベ

ガスも 1 カ月程度止まるとお考えください。お湯を沸かすなど調理に必要なボンベも 1 本で 2 日持ちますので、1 カ月だと 15 ～ 20 本用意しておく必要があります。

◎ 携帯トイレ

先ほども言いましたが、震災時の一番の問題はトイレです。仮設のトイレは大変な状態になりますので、特に女性ですが、トイレを我慢して体を壊した方も多くみえます。そこで、1 週間分として最低でも 60 ～ 70 枚の携帯トイレを用意しておく必要があります。

以上、防災グッズをご紹介しましたが、これは被災者の声をもとにお伝えしていますので、決して大げさなものではありません。ただ、この日本は、被災者の協力やメーカーの努力で大変便利な商品が容易に手に入れることができますので、ぜひ必要性を理解し、イツモ起こる可能性のある地震に備えていただきたいと思います。

最後に、サイトの紹介をしておきます。ＮＨＫの「そなえる防災」。同じくＮＨＫの「つくってまもろう」。また、「地震ＩＴＳＵＭＯ．ｃｏｍ」などで、本日お話しできなかった防災関連の対策等について紹介していますので、ぜひご覧いただきたいと思います。

我々は、このように様々な方法で防災を伝えています。皆さんにも防災グッズを揃えて地震に備えていただきたいし、名古屋も震災の懸念が高まっています。「イザ！カエルキャラバン！」の開催など、ぜひ金山から防災のムーブメントを起こして欲しいと思います。

● ● ● ● ● ● ● ●

Q）防犯グッズはどこに置いておけば良いか？

A）私の場合は自宅避難をベースに考えており、持ち出すことを想定していません。よって、置いておくというよりも日々使うイメージを持っています。ただし、持ち出すことを想定すると玄関がいいと思いますし、車も避難の拠点になったという声も多かったので、車のトランクなども良いと思います。

Q）カエルキャラバンはどのような規模のイベントか？

A）主催者によって変わりますが、例えば小学校の場合ですと 200 ～ 300 人程度の参加が見込まれます。その場合、スタッフは 20 ～ 30 人程度必要になります。

＜事務局ＭＥＭＯ＞

今回の語る会は、冒頭でもご紹介したとおり、今後のアクティビティを見据えて、地域の皆さんに関心の高い、そして、事務局としても予てより開催したいと思っていた「イザ！カエルキャラバン！」という防災イベントをご紹介いただきました。

開催後実施したアンケート結果を簡単にご紹介しますと、回答者 21 名のうち、このイベントを「やりたい」「やってもよい」とご回答いただいたのは 16 名（やりたくない 0 ／無回答 5）で、多くの皆さんに興味を持っていただき、事務局一同大変嬉しく思っています！(^^)!

そして、運営スタッフに「なりたい」「なってもよい」と回答いただいたのは 15 名（なりたくない 0 ／無回答 6）と、大変前向きなご意見をいただき、事務局一同大変心強く思っています。

今後開催に向け検討を進めていきたいと思いますが、永田氏のお話しにもあったように「みんなでやることが大切」であると思います。事務局としても、今後も皆さんと一緒に「水の人」となって、この金山という地を育てていけるよう頑張ってまいりたいと思いますので、是非是非よろしくお願いします <(_ _)>